

生徒に対する認知の仕方

2024・1・10 重枝 一郎

コーチングは「傾聴」「質問」「承認」が基本スキルである。これは、私がサッカーの指導を始めたころから変わらない。私たちサッカーの指導者は、指導者研修会によってこのことを習う。それは、座学だけでなく、実戦での対応もテストを受ける。教員で言えば模擬授業のようなものである。参加者を生徒役にし、照れくさい気持ちをこえて、同様の参加者を選手のとつもりで指導する。しかし、ただ単にこの基本スキルを使っても、選手とのコミュニケーションがうまくいかないことがある。そんなとき言われるのが、それは指導者の「信念」「あり方」が背景にないからだ。だからコーチングの実践は、自分自身の「信念」「あり方」を学ぶ機会になる。

「信念」についてだが、それには相手への認知の仕方が影響する。

「人は誰も成長したいと思っている」「人は自分の中に今の答えをもっている」「一人一人見えている世界が違う」「人はそれぞれである」。これらのことは、相手の存在をどう見るかという認知の仕方を示している。認知の仕方が相手とのかかわり方を決める。そして、かかわった通りに相手は反応を示してくる。だから、「人は誰も成長したいと思っている」「人は自分の中に今の答えをもっている」「一人一人見えている世界が違う」「人はそれぞれである」のような見方はもちろんのこと、そういうことだという「信念」をもつことが大切になる。

雑草は、芽を出せと命じなくても芽を出し、育てようとしなくても育っていく。コーチングでは、人もそう考えることが大切になる。このことは「人は誰も成長したいと思っている」につながる。雑草は、日光と水分があれば芽を出し成長する。人も「愛情」という日光と「信頼」という水分だけで成長する。またそれは、「その人の中にある答え」を引き出す。この引き出すことがコーチングである。

私もよく、家の庭や駐車場の雑草の草抜きをするが、本当にいろんな種類の雑草が生えている。これは「一人一人見えている世界が違う」「人はそれぞれである」につながる。様々な人がいるわけであるから、自分の価値観を押し付けたり、成長を強制したりすることは、その人が本来持っている生きる力を奪ってしまうことになる。

「あり方」についてだが、これは「ビーイング」という。私も学校説明会の校長の話では必ず「ビーイング」の言葉を使う。「自分はどうかあるか？」という自問自答が重要という話をする。コーチングするにあたっては、目の前の成果を追い求めるのではなく、自分は「愛情」「尊重」をもった人であるという「あり方」の認識が大切になる。

だから私は、「本校の教師としての5つのミッションバリュー」を最初の職員研修会で語った。学校HPにも発信している。私は結局この「あり方」によって、何をするにも結果が違ってくると思うからである。

そこで、始業礼拝での「讃美歌・新しい年を迎えて」からも「あり方」を認識したい。

自分だけ	生きるのではなく
みな共に	手をたずさえて
み恵みが	あふれた国（学校）を
地の上に	来たらすような
生き方を	今年はしよう



生徒との信頼関係・・・「信頼」はその人の未来を「だいじょうぶ！」と信じることである。「信用」とは違う。また「期待」でもない。「期待」だと期待に反する結果が出たとき、動揺が起これり、「愛情」「尊重」に揺らぎが生じる。だから「信頼」である。しかし、「信頼」にはある意味勇気が必要になる。もし、相手の言動に対して「信頼を抱けない」と感じたときには、「この言動にどのようなプラスの意図が働いているのだろう」という興味を喚起してみる。そうするとまた「信頼」は継続する。

【参照】「コーチングの話①」84号 「コーチングの話②」85号